

補綴治療における EBD(Evidence based Dentistry)を考える

錦織 淳

臨床医は、日常臨床で多くの問題に遭遇する。その問題解決には、通常いくつかの選択肢が存在し、なんらかの方法で一つの解決法を選沢・決断することになる。Anderson によれば、EBD コンセプトが登場する以前、一般的にはその決断に、過去に遭遇した同様な成功経験をもとに決断し、パターン化された認識のもとに問題解決が計られるか、同様な経験が無い場合は、生物学的原則により判断せざるを得なかったという。そのような経験や原則に基づく治療の問題は、その治療の可否を評価できないという点と、知識量の異なる歯科医師同士での共通認識を構築出来ない点にある。本来、歯科学が科学というカテゴリーに存在するのであれば、それは普遍的かつ公正なものであるべきである。如何に、歯科治療を科学として、普遍的かつ公正なものにするか、そこで提唱されたコンセプトが EBD である。

一方で、歯科もしくは補綴分野の研究は、EBD のゴールドスタンダードデザインである RCT や前向きコホート研究に限られるという現実も存在する。今回の講演では、その限られた条件のなかで、どのように実際の補綴臨床に EBD コンセプトを補綴専門医として応用しているのかを紹介する。また、それを成功させるために、他にどのような条件が必要なのか、さらに、そもそも EBD とはなんであるのかを再考したい。